

竹内けん

イラスト
成海クリスティアノート

ハーレムギルド

Harem Guild

試し読み版

ハーレムシリーズの世界





● グリンカムビ
ナウシアカ

● フェンリル

ターラキア山脈

● ベリーシャム

サイアリース

フレイア

シュルビー

● カブス

● エバグリーン

エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● レヴィ

● ライオネル

クラナ

カーリング

● ヒューリアス

● ガラテア

バロムリスト

ニーデンベルグ

フルセン

● アヴァロン

● ビーナス

● サラマンカ

メリシャント

樹海

オルシ

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ペルセボネ

シエルファニール

イシュタール

● ゼビュロア

● シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

ランチェロ

ローランス

● ラリマール

● マルタ

カルロッタ



harem guild Characters

【キャラクター紹介】



ルーゼモニア

『山犬傭兵団』で受付をする優しいお姉さん。ダイアナ以前にはエースをしていて各国から一目置かれたほど。今はギルドのみんなの心のオアシス。



ダイアナ

『山犬傭兵団』の随一の剣士で稼ぎ頭。アッシュにとって姉のような存在で異性としては見れていない。アッシュと同じ戦災孤児。



アッシュ

孤児としてギルドに拾われ育った少年。アクロバットにパチンコを使いこなす。美女ならみんな大好き。



ロベルタ

変幻自在の水魔法を使いこなす『鉄鎖』の美少女。表情は乏しいが礼儀正しくどこか不思議。



ジンジャー

『鉄鎖』に所属するダイアナのライバル。元は騎士で長剣フランベルジュを振る腕は一流。豪快で粗悪なセクシーお姉さん。

第一章

ガードの固いお姉さんにも隙はある!?

第二章

エッチな拷問は大歓迎

第三章

綺麗なお姉さんに土下座してお願いしてみた

第四章

先輩は意外とチョロかった

第五章

美人姉妹は、どさくさ紛れに出会い茶屋に連れ込もう

第六章

犬と呼ばれようと本望です

「はあ……」

ゾクゾクゾクゾクゾク……。

（さ、さすがルーゼモニアさん。すごいテクニクだ。こういうのをテクニシャンというのか）

童貞少年の妄想力ではおよびも付かなかったお姉さまのテクニクにさらされて、アツシユはメロメロにされてしまっている。

憧れのお姉さまにすべてを差し出して桃源郷の中を浮遊していると、不意にピリッとした痛みに襲われた。

「はう」

驚いて見下ろすと、裏筋を先端まで舐めあげたルーゼモニアは、そのままピンク色の濡れた舌先を、包皮の穴へと入れていた。

視線があったところで、ルーゼモニアはいったん舌をひっこめる。

「痛かった？」

「はい」

アツシユは素直に頷く。

「そう。でもごめんね。我慢して。いまからおちんちんの皮を剥くわ」

「いっ!？」

少し出ている部分に空気が触れるだけで痛いほどに敏感な器官だ。そんなところを剥か

れると知ってアツシユは恐怖におののいた。

しかし、ルーゼモニアは優しい笑顔の裏に隠しきれない興奮を湛えて命じる。

「包茎おちんちんじゃ満足にエッチを楽しめないわよ。できるだけ優しく剥いてあげるから、我慢しなさい」

「よ、よろしくお願ひします」

もはやアツシユはまな板の上の鯉も同じだ。ルーゼモニアに逆らうような気力はない。覚悟を決めたアツシユは、改めて身も心も、ルーゼモニアに任せる。

「それじゃ、いくわよ」

ルーゼモニアは改めて、唾液に濡れた舌先を伸ばし、男の皮と実の間を押し開いていく。「くっ……」

自分でやるとなったら、耐えられない痛みだが、優しくも美しいルーゼモニアにやってもらっているのだと思うと、なんとか我慢することができる。

「くっ」

ビクビクビク！

逸物が痙攣しだすと、顔をあげたルーゼモニアが忠告した。

「出しちゃダメよ。男の子は我慢強くななくちゃいけないの」

「はい」

奥歯を食いしばり、痛みと射精欲求に耐える。

やがてルーゼモニアの舌が、包皮を剥き下ろした。

「うわ、すごい真っ白。これって恥垢というやつね。まさに初剥きならではの光景ね」

男が処女膜を見て喜ぶのと同じような感覚だろう。ルーゼモニアは恥垢塗れの童貞逸物を眼下に、興奮を隠せていない。

先走りの液の溢れる尿道口を、指先で弄る。

「ルーゼモニアさん、もう！」

「我慢できない？」

「はい。でます」

断末魔のように呻くアッシュを押し倒したルーゼモニアは、素早く膝立ちになった。

「あとちよつと我慢して。どうせだすなら。ここに出したくはない？」

ルーゼモニアが指ししめしたのは、自らの陰唇だった。

「出したいですっ！ 出したいですっ！ ルーゼモニアさんのオマ○コの中に出したいですっ!!!」

「なら、あと少し、あと少しだけ死ぬ気で我慢しなさい」

アッシュの両肩に手を置いたルーゼモニアは、暴発寸前の逸物を素早く自らの膣穴に添えると、そのまま腰を下ろした。

ズボリ！

（あ、熱い。おちんちんが熱い。入ったんだ。ルーゼモニアさんの体内に入ったんだ。す

げえ気持ちいい)

子供のころから憧れていたお姉さまに筆下ろしをしてもらった喜びと感動に、アッシュは打ち震えた。

「あ、すごくおちんちんビクンビクンしている、ああっ！」

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

「あ、きた。きちゃった。中でビュービューいつている。早い！ 早いけど、すごい！ すごい量。すごい脈打っている。ああ！ いっぱい、いっぱいくるううう!!!」

童貞食ったお姉さまは、膣内で溢れる血潮を感じて、悩乱の声を張り上げる。

「あああああああ」

雄叫びをあげたのは、アッシュなのか、ルーゼモニアなのか、あるいは両方なのか、アッシュ本人には分からなかった。

アッシュの脳裏はただひたすらに、真っ白に焼けていた。

仰向けに倒れて脱力していると、射精が終わったことを見て取ったルーゼモニアが腰をあげる。

又チャリ……。

女の体内から逸物が吐き出される。

ルーゼモニアは両手で股間を押さえて余韻に浸った。

「すごいいっぱい出されちゃった……ああ、溢れちゃう♪」



股間に添えた指を掬い上げたルーゼモニアは、愛しげに口に含んだ。

「あはっ、濃厚♪ こんなのおっぱい入れられた状態で放置したら、妊娠確実ね」
普段の上品さからは信じられない淫らな艶姿に、アッシュは喘ぐ。

「ルーゼモニアさん、俺まだ」

たったいま童貞を卒業した逸物は、さまざまな液体に濡れてドロドロであつたが、構わずに天に向かって屹立している。

それを一瞥したルーゼモニアは、熱く溜息をつく。

「そうよね。若いんだし、当然、一発では収まらないわよね」

「はい。ぜんぜん足りません」

「なら、今度はアッシュくんから入れて」

寝台に身を横たえたルーゼモニアは、右肩を下にして、白い左足を大きく上げた。

開かれた陰唇からは、とろとろと白い泡だった液体があふれだしている。

「入れさせてもらいます」

掲げられていたルーゼモニアの左足を抱え、シートに投げ出されていた右足をまたぎ、いきり立つ逸物を、叩き込む。

「あん♪」

若き牡に串刺しにされた牝は色っぽく喘ぐ。

側位での結合だ。

先ほどはルーゼモニアに入れてもらったが、今度は自分から入れた。たったこれだけの違いで、より女を犯したという気分になる。

「動きます！」

「ええいいわよ。思いつきり激しくしちゃって」

ルーゼモニアから許可をもらったアッシュは、最初は恐る恐る腰を動かす。

グチュリグチュリグチュリ……。

ルーゼモニアの体内には、先ほどアッシュが思いつきり注ぎ込んだ精液が大量に詰まっているが、そんなことは気にならない。

「気持ちいい、気持ちいいです。ルーゼモニアさんのオマ○コ、すつぷく気持ちいいです」
「あ、ありがとう。アッシュくんのおちんちんもすつぷく固くて気持ちいいわ。だから、遠慮しないでいいのよ。思いつきり激しく腰を使って」

「どうやら、ルーゼモニアは激しくされたらしい。それと察したアッシュは夢中になつて腰を動かす。」

初めはぎこちない腰使いだったが、なにをやってもルーゼモニアが受け止めてくれるというのを察して、勇気を持ったアッシュは大胆になる。

「あつ、いい、それいい。上手よ。もつと、もつと激しく」

「はい。激しくいきます」

ガッ！ ガッ！ ガッ！

ついにショーツの吸引力の限界を突破したのだろう。ポタポタとシートに滴が落ちる。そして、ダイアナは盛大にのけぞった。

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイ——ッ!!!」

ビクンビクンビクン!!!

アッシュの腕の中で、ダイアナの逞しい肢体が痙攣する。

（うわ、先輩。イっちゃった。先輩ってイクときこんな顔になるんだ！）

いつも凛々しくも頼もしい女剣士も、指マンでイカされたときには、すっかり放心状態であつた。

毎日顔を合わせていたが、こんな無防備な表情を見たのは初めてだ。

達成感に駆られたアッシュは、ダイアナの乳房や股間から手を離し、腹部あたりで両手を組んで、しっかりと抱きしめる。

「はあ……、はあ……、はあ……」

弟分に無理やり絶頂させられたダイアナは、しばし荒い呼吸をしていたが、やがては落ち着く。

それを見計らってアッシュは、右の耳元から提案した。

「ねえ、先輩。俺とエッチしよ」

「……」

ダイアナは無言である。

そこでふとアッシュは閃いた。

（そういえば、女性を口説くときはやりたいではダメだって、ルーゼモニアさんに教えられたよな。なら言い方を変えよう）

アッシュは改めて、提案する。

「先輩、俺と付き合ってください」

「……」

「ねえ、いいでしょ。俺、先輩のことメッチャ大好きです」

甘えた声を出されたダイアナは、片目でジロリとアッシュの顔を窺ったあと、諦めたように大きく溜息をつく。

「はあく……仕方ないな」

「それじゃ」

歡喜するアッシュに、ダイアナは頬を染めながらもしぶとくいったていで頷く。

「まあいいだろう。おまえとは、その……長い付き合いだからな」

「やった♪」

歡喜したアッシュは、ダイアナを押し倒した。

「ちよ、ちよっと待て」

ダイアナの抵抗をもとせずに、その肢体をさかさまにすると、逞しい両足を揃えて上げさせて、ズルズルズルと一気に白いショーツを抜き取った。

ヌラーと恥ずかしい粘液が糸を引く小さな布地を天井高く放り上げると、揃えていた両足を今度は、ガバツという擬音が聞こえてきそうなほどの大股開きにしてやった。

「うわ、これが先輩のオマ○コなんだ」

「み、見るな」

ダイアナは慌てて股間を手で塞ごうとしたが、頭をシートに押し付けられるという無茶な体勢にされていたため、バランスをとるために腕を上げられなかった。

それをいいことに、アッシュはダイアナの陰唇の左右に人差し指と中指を添えて、ぐいつと開く。

ヒクヒクヒクヒク……。

鮮やかな赤い肉が開閉を繰り返す。

（うわ、すげえオマ○コの匂い。まあ、風呂に入っていないんだし、仕方ないか。それにしてもトロトロ。まさに入れごろ、食べごろ、犯しごろ♪　これが先輩のオマ○コなんだ♪）
もう我慢できない。

アッシュはズボンの中から逸物を引っ張り出した。

勢いよく跳ね上がった逸物は、いまなら鉄剣と撃ち合わせても勝てそうな気がした。それを無理やり下に向けて、女の姫貝へと向ける。

「ちよ、ちよつと待て、おまえ、それを本当にあたしの中に入れるつもりか」

両手で必死にシートを押しさえ、頭倒立状態のダイアナは恐怖におののいた声を出す。

「はい、絶対に入れます！」

ここまで来たらもう止まらない。意地でも、死んでも、なにがなんでもダイアナの中に入りたかった。

「あ、あたし……じつは、その……は、だから、その……」

ダイアナらしくなく、なんとも歯切れ悪く、口の中でごによごによ言っているが、アッシュはお構いなしに、切っ先を女壺の入口に添えた。

「いきます！」

暴れるダイアナの両足を、それぞれの手で掴み、アッシュは腰を落とした。

もはや鉄槍と化した肉刀が、女肉をえぐる。

ブツン！

「ひい！ い、痛い！」

「うわ、先輩、暴れないで」

ダイアナが遅しい脚をばたつかせたので、アッシュは必死に押さえ込む。

（そ、それにしても、キツ！）

予想通り、ルーゼモニアよりも明らかに膣圧が上だ。上どころか、肉棒を絞め殺さんばかりだ。

（さすが先輩。オマ○コもハンパねえっす）

痛いほどの締め付けだが、それはそれで嬉しい。



おっかない先輩のキツマンを堪能していると、不意に眼下の白い下腹部に、ツーンと赤い滴が垂れていった。

「せ、先輩。血、血が出ています」

「いや、これはその……」

真っ赤な顔で、涙目になっていたダイアナは顔を背ける。

（うわ、先輩、泣いていたんだ。ヤバイ、乱暴にしすぎた。先輩の涙なんて初めて見ちゃった）

さすがに罪悪感を覚えたアッシュだが、不意に脳裏で閃いたことがある。

「おちんちんを入れたら、血が出る。これってもしかして、その……破瓜って言いませんか。もしかして、先輩って初めてだったんですか？」

「わ、悪かったな」

年上の女として、ダイアナはいささかバツが悪そうだ。

「……。わたしを口説くような命知らずは、おまえぐらいだ」

改めて考えてみれば、出会ってから四年間。ほとんど毎日、顔を合わせていたのだ。ダイアナが異性と付き合ったことがないことは、アッシュは一番、知っているはずだった。

「先輩の初めての男が俺だなんて……すげえ、嬉しいです」

アッシュは女性に処女性を求める性癖はなかった。大人の女であるルーゼモニアにいろいろと教えてもらうのが夢だったくらいだから、むしろ、真逆の性癖だったといっている。

それをいいことに、アツシユは乙女の陰部に顔を近づける。

ぷーんと処女臭が薰ってくる。いま風呂に入ってきたばかりだというのに、匂いは完全には除去できなかつたらしい。

それだけきつい匂いだった、ということなのかもしれない。

「うわ、これがロベルタちゃんの処女膜なんだ。処女膜って初めて見た」

アツシユはダイアナの処女をちようだいしたわけだが、あのとときは確認している余裕もなく、いきなりぶち込んでしまった。

全体に白っぽい粘膜の穴の奥に、薄い膜が張っている。そして、泡状の穴がいくつも開いていた。

（あれを破ってちんちん入れるんだ。うおー、入れてえ、今すぐぶち破ってしまったい。でも、我慢我慢。いまはもう一つお宝があるんだし、じっくり楽しまないともつたいたい）

生唾を飲んだアツシユは、左右の親指を下にある陰唇の左右に添えた。

「次はジンジャーさんのオマ○コを見せてもらいます」

「ああ、ロベルタと比べられちゃうのかあたい……」

いくら淫乱女とはいえども、この状況は恥ずかしいのだろう。緊張が見て取れる。ただし、その羞恥を楽しんでいるようにも見える。

くばっ！

赤黒い粘膜があらわとなる。

（おお、使い込んでいるって感じだ）

しかし、ジンジャーの陰阜からは、ロベルタの陰阜ほどに強烈な匂いは薰ってこない。

（処女のオマ○コのほうが臭いがきついつてのは本当だったんだなあ。先輩のときもそうだったし……）

男としてはついつい勘違いしてしまうが、清純な乙女ほど、その秘密の花園は薰り高いものだ。

（それにしても、オマ○コってこんなに個人差があるもんなんだ。ジンジャーさんのほうがデカイ。穴にちんぼ入れたら絡みついてきて、すげえ気持ちよさそう。ロベルタちゃんのは小さいな。初めてだっていうし、慎重に扱わないとなあ）

全体の大きさも違えば、陰核の大きさもまるで違う。

ジンジャーの陰核は大粒で真珠がデンと外界に姿を現しているのに対して、ロベルタの陰核は花開く前の朝顔のように小さく窄まっている。

それでも、どこか似ているように感じるのは、姉妹だと知っているがゆえの先入観かもしれない。

トロ、トロトロトロトロ……。

白っぽい姫貝から溢れた蜜が、赤黒いアワビに滴った。

（もう我慢できない。いただきます）

アッシュは下のアワビから、上の姫貝まで豪快に舐めあげた。

「あん」

「ひい」

姉妹の二重奏が耳を心地よく刺激する。

(たまらん)

アッシュは夢中になって、二つの姉妹貝を食る。

「ああ、すごい。なかなか、う、上手い。上手いじゃないか」

「ひい、こ、これ、すごい」

ジンジャーは快感を楽しみ、ロベルタは快感に翻弄されている。

(ああ、二種類の蜜が混じって、美味さが倍増だ。いくらでも飲める)

味覚ではない。どちらか一つでも、牡を狂わすには十分な蜜だ。それを混ぜて味わう贅沢に、アッシュの舌は高速回転した。

そして、その狂気の舌技に翻弄された姉妹は、ほとんど同時に絶頂する。

「ああああんん」

「ひいひいひい」

ビクンビクンビクン！

まったく体形の違う二人が、連動するように痙攣している。

(えへへ、やった)

姉妹の艶姿の競演を見下ろして、アッシュは口元を右手の甲で拭いながら、満足感に浸

る。

そして、落ち着いたところでジンジャーは、胸の上に横たわっていた妹を下ろすと、仰向けになったロベルタの上に覆いかぶさる。

「もう、我慢できねえ、入れてくれ」

アッシュの眼前に、ロベルタとジンジャーの陰唇が並ぶ。ロベルタに入れると正常位。ジンジャーに入れると後背位だ。

スレンダーなのにバンツと張り詰めた大きな尻をしている。ダイアナに通じる体形だが、さらに極端な凹凸に恵まれている。

「いただきます！」

アッシュはなにも考えられず、目の前の餌に飛びついた。

大きな尻肉を左右から掴むと、自慢の逸物で一気に貫く。

「あああ♪」

アニマルスタイルのお姉さまはのけぞって悶える。

「すごく硬い♪」

「まだまだこれからです」

アッシュは尻を掴んでいた両手を前に伸ばすと、ジンジャーの脇の下から手を入れて、爆乳を鷲掴みにする。

（やっぱりでつけえ〜、手の中にぜんぜん収まらない。いったいどれくらい男に揉ま

れば、こんな化け物おっぱいができるんだ」

淫乱お姉さまを自分の逸物でイかせまくりたい、という野望に突き動かされたアツシユは、まずは慎重に腰を引いた。

ズルズルズル！

それから改めて押し込む。

「あん、焦らすのはなしよ。思いつきり激しくやって」

アツシユの思惑を嘲笑うかのように、ジンジャーは自ら腰を使い始めた。

（うお、この腰使い。ま、負けられん）

男としての意地で歯を食いしばったアツシユは、自らも激しく腰を使うことにする。

「必殺、超ウルトラハイパー高速突き！」

アツシユの経験上、女は何だかんだ言って、素早く突かれるのが好きなようだ。

ルーゼモニアも、ダイアナも、アツシユに激しく突きまわされたときには、ヒイヒイと

喘ぎながらイキまくっていた。

そして、それはジンジャーも例外ではなかったようだ。

「ああ、すごい、激しい。こんなの、初めて……」

ジンジャーの敗北宣言に、アツシユは勝ったと内心でガッツポーズする。

キュッ！ キュッ！ キュッ！

腔洞が心地よく肉棒を締め上げてきた。

（おお、ジンジャーさん、イっている。この締め付け、すげえ気持ちいい♪）

一緒に出したくなるどころだが、アッシュは下腹部に気合いを入れて、なんとか耐えた。そんな男女の格闘技を、ジンジャーの下で仰向けになっていたロベルタが、潤んだ瞳で見上げてくる。

「アッシュさん、わたしにも……」

「うん、わかっている」

暴れ牛のようなジンジャーを組み伏せて、思いつきり腰を使うのは楽しい。淫乱お姉さまをトロットロのアへ顔さらすまで連続で犯しぬきたいという願望は強烈であったが、ロベルタを放置するのは礼儀に反するだろう。涙を吞んで断念する。

「ジンジャーさん、いったん抜きます」

チュポン！

「あん」

逸物をジンジャーの膣穴から引き抜いて、そのまま下にあるロベルタの膣穴に近づける。

「いくよ」

「うん」

ジンジャーの肩越しに、アッシュとロベルタは見つめ合う。

体勢的に、ロベルタの陰部を見ることができず、挿入が難しいと思っていたら、ジンジャーの手が導いてくれた。

「ほら、ここよ。そのまま押し込んじゃって」

「ありがとう」

淫乱お姉さまにお礼を言つて、アッシュは腰を落とした。

ブツン！

「あああ」

たしかに異物を突き破った感覚が肉棒の先端から伝わってきた。そして、入口さえ突破してしまえば、あとは道なりにズブズブと入る。

狭い隧道ずいどうを押し開きながら進んでいくと、すぐに最深部に届いてしまった。

体が小柄なだけあって、腔洞も浅いようだ。

（う、すげえ締まる）

ジンジャーの楽しめる締めりではなく、純粹に痛いほどの締め付けだ。破瓜の痛みで踏ん張ってしまったているのだろう。

（穴の大きさは全然違うけど、さすがに姉妹だけあって、どこか似ている気がするな）

姉妹だということでの先入観に過ぎないのかもしれないが、どこか通じるものを感じたアッシュは、ここで限界に達した。

元々ジンジャーの乱れ腰に追い詰められていた逸物である。

（で、でる……）

ドビュ！ ドビュ！ ドビュ！



「ほう」

ピク、ピクピクピクピク……。

体内に熱い血潮を受けたロベルタの小柄な体軀は痙攣している。

「ふう」

思う存分に射精し、満足したアッシュは小さくなった逸物を引き抜く。

妹の血に染まった肉棒を見下ろして、ジンジャーが溜息をつく。

「ああ、ロベルタの中に出しちゃったか……」

「ごめん。でも、別にどっちが上とかいうわけではなくて、二人ともオマ○コすげえ気持ちいいから」

女として、自分の中で出されないのは屈辱だろうと察したアッシュは、フォローを試みる。

「あはは♪ いいっていいって、どうせまだまだ終わりじゃないだろ」

「当然です。俺は一晚で十発以上できます」

アッシュが胸を張ってこたええると、ジンジャーは口笛を吹く。

「ひゅ〜♪ さすがスケベ少年。あたいはそういう絶倫ちんちん大好きよ。抜かず十発なんてされた日には、本気になっちゃうわよ」

そこに破瓜の痛みに涙していたロベルタが口を挟んできた。

「お姉ちゃんにやるなら、わたしにもお願いします」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

